

1-4-2LS 日本語

## 実践！学会発表の後で論文を書けと言われたら

How to write a paper after presenting  
the abstracts for academic meetings

慶應義塾大学医学部 香坂 俊

慶應義塾大学医学部 澤野 充明

香坂 俊  
Shun Kohsaka

Shun Kohsaka, Keio University School of Medicine  
Mitsuaki Sawano, Keio University School of Medicine

対象者 医師・後期研修医(卒後3年目以上)・初期研修医(卒後1-2年目)

Target Doctor・Senior resident(3+years after graduation)・Resident(1-2 years after graduation)

学会発表を猛特訓の末なんとか乗り切ったのもつかの間、指導医が英文で論文を書こうと言ってきた！「そんな暇も気力もありません」という方々、もしかしたら非常に大きなチャンスを逃しているの可能性があります。そして、その指導医はもしかしたらふかーい親心があってそのようにアドバイスをしてくれているのかもしれない。

このセッションでは、指導医と研修医の立場それぞれからの演者がダイアログ（対話）形式で

- ・どんなスタイルの論文がこの世の中にはあるのか？
- ・どうやって文章を組み立てていけばよいのか？
- ・忙しい研修生活のどこに論文を書く時間をみつければよいのか？

といった実践的な話題を取り上げ、みなさんと話しながら解決策をみつけていこうと試みます。また「そもそも論」として

- ・なぜそうまでして論文を書かなくてはならないのか？
- ・論文を書いて何かいいことが果たしてあるのか？

という（やや日常の中では手の届きにくい）ところにも研修医や専修医の視点から答えようと思っております。ダイアログも、そして質疑応答の時間も、指導的立場（香坂：臨床研究系の大学院コースを運営）とその大学院に入学して苦勞している立場（澤野：その大学院2期生）それぞれからお答えするようにしますので、ぜひとも奮ってご参加ください。

The aim of this session is to provide the real-world answers to overcome the barriers in writing peer-reviewed manuscripts during the residency or fellowship training. Well-written papers are read, remembered, cited. Poorly written papers are not. What are the critical differences between the two? And more importantly, where can residents and fellows fit in the time to write the papers? We will try to discuss these topics in a dialogue format, a narrative conversation between the actual staff member that mentors clinical research project, and his scholar.